

## 気の毒な抽選がはじまった。



「赤いくじ」(原題「赤い籤」)は、昭和三〇(一九五五)年「オール讀物」六月号に掲載された。

『赤いくじ』昭和 33(1958)年 光書房

現在入手できる本

『或る「小倉日記」伝 傑作短編集(一)』新潮文庫  
『松本清張短編全集 2 青のある断層』カッパ・ノベルス  
『松本清張全集 35 巻』文藝春秋

### 作品紹介

昭和一九(一九四四)年に朝鮮・京城で新しい師団が編成された。米軍の上陸に備え朝鮮を守備する「守朝兵団」と「備朝兵団」である。

「備朝兵団」に、参謀長の楠田大佐と、高級軍医の末森軍医少佐がいた。

彼らは、司令部の在所である全羅北道高敞で知り合った、出征軍人の妻である塚西恵美子の高貴で知的な美貌に心を奪われ、互いに競い合うようになる。

翌年八月、日本敗戦の混乱のなか、武装解除のために来るアメリカ軍に応じるようにとの指令を受ける。とっさに楠田が提案したのは、慰安婦によるアメリカ軍への「もてなし」であった。目的は知らされず、人選はくじ引きで行われ、塚西夫人も該当の赤いくじを引いてしまう――

(専門学芸員 柳原暁子)

### 目次

- 松本清張研究会第32回研究発表会……2
- 特別企画展『清張と戦争  
―読み継がれる体験と記憶―』……5
- 展示品紹介……6
- 点描 作品の舞台を訪ねて……6
- 国際共同研究公開シンポジウム……7
- 友の会活動報告……7
- トピックス……8

# 松本清張研究会 第32回研究発表会

平成27年6月6日(土)午後2時

東京学芸大学

清張映画が数多く作られた時期の映画界

《松本清張の映画化作品》は1957年公開の『顔』にスタートして74年の『砂の器』までの17年間に、実に26本が作られています。全部で36本です。58年に『張込み』、『眼の壁』、『共犯者』、『影なき声』、『点と線』と、いっぺんに5本。翌年2本、60年は3本、61年は4本、62年は1本、63年に2本、65年に3本です。この八年のあいだに集中的に、松竹が比較的多いが、大映、日活、東映各社で制作をされている。

「日本映画産業統計」(日本映画製作者連盟)の数字を見ると、一番「入場者数」が多いのは1958年で、観客数は11億2745万人。これが65年になると、3億7267万人で、三分の一くらいに急速な落ち込みになる。映画館のスクリーン数も同様で58年は7067、65年になると一気に減少して4649。70年近くで30000くらいまでに落ちていく。実は58年をピークに雪崩を打つように、日本映画は急速に斜陽の道を進ん

ていくわけです。

『砂の器』が74年で、まさに日本映画が下降を迎えていく時期に、松本清張という作家の原作ものが映画産業にとって、重要な存在として消費されたわけです。

## 松竹と清張映画

1956年に松竹は、配給の収入で東映に首位を奪われるという屈辱的な事態になります。翌年、挽回しようとして松竹は東映の方法に追随しようとし、東映は、片岡千恵蔵や大川橋蔵という時代劇スターをそろえ、これに美空ひばりなどが共演をして、明朗闊達な時代劇路線を中心に「二本立て興行」で多くの観客を集め、成功していたのです。しかし上手くいかず、同年すぐに『一本立て』に戻します。それでも上手くいかない。57年、松竹は配給の収入で東映にも負け大映にも負けて、第三位に落ちます。

1958年に『張込み』が作られるが、映画界の一番いい年にすでに、松竹は81歳の大谷竹次郎が製作を担当するなど映画企業として混迷の度を深めていました。対して、日活は石原裕次郎の『嵐を呼ぶ男』が大ヒットします。東映は初のアニメ映画『白蛇伝』を公開します。この年、東映、大映、日活、東宝で、松竹は何と最下位の第五位で、屈辱的な惨敗を味わいます。

1959年11月、大島渚の『愛と希望の街』が

公開されます。大島は、新しい前衛的雰囲気をもった映画監督でした。しかし、城戸四郎の「新大船調」のメロドラマ路線に合わないというこ

とで、公開は一部の映画館に限定されました。が、とりあえず、新しい芽は一つ出てきた。60年になると、松竹の株は無配、配当が出せないという事態に陥ります。6月に、大島が第二作『青春残酷物語』を出して大ヒットします。松竹の救世主となり、松竹ヌーベルバーグにつながっていく。8月に『太陽の墓場』、10月に伝説的作品『日本の夜と霧』が公開されます。60年代初頭にかけた日本の左翼、学生運動の分裂を描いた映画ですが、浅沼稲次郎社会党委員長の暗殺事件が起きた直後、公開中止になってしまいます。松竹は一時は大島に期待をかけたが、その希望を自分たちで摘んでしまった。翌年、大島は退社し、64年には当時、松竹の代表的な看板スターだった佐田啓二が車で事故死をする。

このように松竹という会社の歴史を見ながら、清張映画化作品のケースと照らし合わせると、57年の『顔』あたりから、すでに『張込み』の著作権も獲得していたようですが、松竹の従来の路線から一歩違う方向に踏み出そうとして模索が始まります。58年に『張込み』、『眼の壁』が作られていくことを考えますと、松竹がやはり清張作品に、一縷の希望を見出そうとしていたことが分かります。

## 『影なき声』

日活で映画化されたのは、1958年の『影なき声』という鈴木清順監督の映画です。原作の『声』という短編は、新聞社の電話交換手だった女性が主人公です。ある日、間違えて殺人現場に電話をつないでしまう。電話に出た相手、つまり犯人の声が耳に残るが、事件はお蔵入りになる。その後、彼女は結婚して会社を辞める。夫の知り合いの声が誰かに似ている気がする。そこからミステリーが深まっていく。その男から来た電話で話した瞬間に「あのときの声だ」と記憶がよみがえって、前半部分は終る。そして後半になると、彼女の死体が発見され、これが小説の方ですね。



映画は、実は小説のように視点を途中から全く変えてしまうと、つながりが非常に難しいので、南田洋子の演じるヒロインは死なない。殺されるのは実は声の側の男(宍戸錠)。警察はヒロインの夫を犯人と考えて、逮捕してしまう。彼女は、真犯人を新聞社の上司の記者(二谷英明)とともに調べ始める。物語構

成は小説と大分違ってきます。

《そのことがあって四五日過ぎた。その四五日が、朝子を痩せさせた。疑惑と恐怖が襲う。夫には言えなかった。ここまで来てようやく言えない。(中略)ひとり知った秘密に懊悩した。誰にも言えないだけに、それは内攻した。小説ではこのわずか三行くらいです。

## 講演

### 1960年前後の松本清張

#### 文学と映画のあいだ

講師 紅野謙介

日本大学教授



映画で懊悩をどう表現したらいいか、実は非常に難しい。鈴木清順監督はそのヒロインの懊悩を、彼女の夢、妄想の世界を通して非常に巧に映画化しています。麻雀を終えた犯人グループと夫が外へ出て、そして部屋に戻って鍵を開けると、穴戸錠がそこにいる。思わず叫んで、アパートの廊下を奥の方に走っていく。また別な部屋を開けると、そこにも穴戸錠がいる。次々に扉を開けると、そこに同じ人物が同じポーズで現れてくる。そういう不安や恐怖の表現の仕方を鈴木監督は巧に行った。つまり、小説の中では、スピーディにストーリーを展開するために省略している部分に、映画の作り手たちは逆に自分たちなりに自由にできるカンパスを見出したと言ってもいいかもしれませぬ。また、主人公の背後の鏡台に襖を開けて穴戸錠が現れるところが映る。鏡を使って、彼女の不安を観客にも掻き立てられる形で描き出す。こういう映像的なテクニックを駆使するのに、逆にいえば、清張作品の非常に簡潔で、ある意味では抽象的な書き方が、映画の作り手たちにとってインスピレーションを刺激する、想像力を掻き立てる要素になったと言えらると思います。

### 【張込み】

野村芳太郎は職人的な監督で、『張込み』を作るまで、青春物、喜劇物など、非常に軽い映画を一年間に四本も五本も作らされていましたが、1958年の『張込み』の段階になって大きく変わってくる。野村監督は橋本忍と組んで独自の映画作りを始めていく。橋本忍は張込みをする刑事は一人か二人かなど、小説のディテールをとことん洗いなおとした上で脚本化に取り組んだ。これによって『張込み』という映画は非常に

面白い優れた作品になっております。

今、『張込み』の有名な冒頭シーンを観ました。非常に長い、十分ちかかたつてようやくタイトルが出る。これだけ長いタイトル前（アバンタイトル）は珍しいが、これがプロローグなんですよ。小説の冒頭、文庫本でも2ページぐらいの部分が、映画ではこうなっているわけです。

小説では季節は秋ですが、映画では夏で、夏の暑さが、車内の扇風機が練りかえし練りかえしカットとしてインサートされ、汗が滴り落ちる感じに非常によく出ていました。長旅の疲労感もよく出ています。描写の一つ一つに、映画の世界ならではのものが出てくるわけです。宮口精二という俳優が疲れたおじさん感を非常によく出している。

またそれまでのようにスタジオで撮るのではなく、横浜駅のシーンは隠し撮りで全部実写で撮ったそうです。走り出している列車に飛び乗るといふシーン自体が、小説の描写とは違うものですよ。躍動感が映画によってよく出て来ている。列車を映画的に見ると、動きを非常に強く感じさせる。その動きをこの野村監督は非常に上手く撮っている。

最後のほうの旅館はセットですけど、ほかの場面はオールロケで、佐賀の町の全体を見せる場面もありました。掘割で子どもたちが水浴びをしている光景、あるいは町並みなどが、映画の四角く切り取られた空間の中で、確かな1950年代後半の日本の光景、風景として生き生きと活写されています。清張作品にその直接の描写はないが、旅の記録、あるいは鉄道を取り入れる、あるいは地方性を非常に強調する、清張作品のそういったところが、映画作家たちにとって撮るべき素材を強く喚起させる形になっ

ている。映画の作り手たちは清張作品にインスパイアされることによって、高度成長期に変わっていく街の風景や自然をしっかりとカメラに押え、記録していく。清張作品のそうしたところが、職人的な監督の一人であった野村芳太郎を、これは自分にとって本気になる作品だと意気こませたのでしょう。

### 清張原作の《豊稜な空白》

松本清張はすさまじい分量の作品をお書きになつていきますよね。ある意味では体力の限界に挑むような書き方をしている。こういう書き方では、描写の一つ一つをディテール細かく書き込んでいくというよりは、やはりざっくりと大きな歩幅で歩んでいくような、物語の作り方を

### 研究発表

#### 松本清張とラオス

##### ——ベトナム戦争の記述をめぐって

発表者 尾崎名津子

日本大学非常勤講師



#### 戦争と（ジャーナリズムと）一人の女

『象の白い脚』（原題『象と蟻』）は1969年8月から一年間「別冊文藝春秋」に連載されました。同年5月18日から24日までラオスに取材に行っています。松本清張はこの前に北ベトナムに行つて、ファン・パン・ドン首相にも会っています。68年中、特に4月中は、多くの新聞、雑誌の記事を書いています。同年の4月に開高健の今回取り上げる『輝ける闇』が新潮社から書き下ろして刊行されています。

していかざるを得ないだろうと思います。

しかしそこに逆に、映画の作り手たちは自分たちで味付けできる、具象化できる、そういう世界を見出した。作家のネームヴァリュウもありました。しかしそれ以上に、映画の作り手たちにとっては非常に刺激的なアイデアとストーリー、そしてむしろ余白の部分に彼らの表現を可能にする、映画ならではの世界を確立する、《豊稜な空白》を見出したのではないかと思います。少なくともこうした《豊稜な空白》は、ちょうど危機にあった、まさに下降しつつあった日本の映画産業にとってみれば、新たにそこに一つの可能性を見出し、映像作家としての歩みを残していくべき、そういう材料と捉えていったのだらうと思います。

主人公はジャーナリストの谷口爾郎。友人の死の真相を探るため、内戦中のラオスの首都にやってきました。西洋人がホテルで殺殺され、その事件に好奇心を抱いた現地在住の日本人も射殺されてしまう。ついには、謎を追う谷口にまで魔手が迫り——谷口は発狂した状態でメコン川に浮いているところを見つけられます。

『象の白い脚』と『輝ける闇』は発表時期がほぼ同時期で、両作ともジャーナリストが主人公で、書く男が東南アジアに行くというモチーフを持っていきます。今日は《女性と言葉》との関係から両作品を読み解いていきます。

まず『輝ける闇』の視点人物である「私」は、言葉と戦争をどのように捉えていたか。作品中、紙のなかで人びとは戦争を嘆いたり、響きと怒りを投げかけてくるが、言葉は「私」に届かない。「私」とはいっさい共鳴しない。次に「私」の

戦争に関する認識です。《私は狭い狭い薄明の地帯に佇む視察者だ。》と言います。また、残忍なことを残忍だと名付けてしまうことへの抵抗が、「私」には強くある。言葉にすることへの抵抗がかなり強くある。戦争を言語化することへの不可性性の状況のなかで、「私」はベトナム人の素娥（とうが）という少女と愛人関係にあります。素娥という存在を通して、というよりも素娥自身が出来事を作り出すわけです。そして、素娥と作り上げた言葉しか「私」の中に根付かない。

最後の場面、「私」は素娥を離れて戦争の最前線へ向います。自分を視察者と規定しておきながら、開き直って見ることはその物になることだ」と認め高らかに宣言して、ついに《私のための戦争だ》と言って戦地へ向っていく。すなわち、素娥によって言葉が生み出されたように、「私」は自分自身の手で自分に形を与えるために戦場に向うわけです。

一方、松本清張の『象の白い脚』で素娥と役割が重なるのは、フランス人の女性記者のシモーヌです。通信員としてろくに働いてないらしいと噂され、アル中とも言われているが、テキストをよく読むと、実はたいして酔っていないし、明晰な頭も持っているようです。結局、谷口と一回だけ肉関係を持つ五十代の女性ですが、作中、「あなたのほうがよっぽど取材能力がある」と、シモーヌは谷口にジャーナリストとしてのパ

の」と、練りかえし暗示のように谷口を考えさせ、書く方へと導いていく役割を果たします。

では、シモーヌはどのような言葉を谷口に与えていくのか。『輝ける闇』の素娥とは質が違う言葉を与えます。谷口が明かそうとしている謎に迫る、そのヒントとなる言葉を与えるのです。谷口の推理が始まっていく、そのような機能をもつ言葉です。谷口が最後に東京の友人に宛てた手記があります。その中でも、谷口はシモーヌの言葉に導かれ、その言葉を幾度も思い返して、見えなかつた、言葉になつてこなかつた真相らしきものを、言葉へと練り上げていくという作業を行なっているわけです。

『象の白い脚』と『輝ける闇』において、共通の女性の役割は男性に言葉を与えることです。開高の『輝ける闇』の場合はジャーナリズムの言葉の対極に位置する何かが女が与える言葉だと思えます。言葉の発生自体、言葉の始原をつかむ営みを、女性が役割として担っていく。一方で、『象の白い脚』は、単にシモーヌの言葉は謎解きに使われているとしか読めないかもしれせん。しかし、よく見ると、谷口はシモーヌから言葉を与えられることによって、次のステップへと思念を深めることができる。その点である意味、別の新たな言葉の発生を女性のシモーヌが担うと言えるのではないかと思います。

### 「かつて」の相似

清張とエドガー・スノーの対談「中国と北ベトナムはどう出るか」は、『象の白い脚』の前年に掲載されており、ベ平連も含めた世論がベトナムと日本を重ねがちだったのに対して、清張はむしろアメリカと日本とをアナロジカルに語っている。これが非常に特異な点です。太平洋戦争と

ベトナム戦争を重ね、相似形として捉えるという点は、戦争を知る世代であれば同じなのですが、その視点の内実が異なっているのです。

そもそもこの小説の原題は『象と蟻』で、象はアメリカで、蟻はベトナムなのです。『象の白い脚』に改題したときに、象はラオスであると同時にアメリカである、ダブルミーニングの可能性を感じさせます。というよりも、原題はアメリカ象なのですから、本来の清張の興味がどこにあったのかが仄見えるわけです。松本清張記念館での調査で、CIAの阿片工作を初めとするラオスへの内政干渉の記述が、後から大量に加筆されていることがよく分かりました。清張のベトナム戦争、インドシナ地域に対する興味はアメリカへの興味が先立ってあったのです。ベトナムを書かない、戦場行為の悲惨を書かない清張の態度は、今までは開高と違つて戦場に行けなかつたからだとか実合理的な理由によると言われてきましたが、そうではなくて、興味の持ちようによる選択なのではないかと思うわけです。

### ラオスは「日本を映す鏡」

「ベトナム戦争は日本を映す鏡」だとはハイブンスも川村湊氏も言っていますが、清張にとつてはむしろ「ラオスこそが日本を映す鏡」だったのです。清張は三つの視野を持っていました。まず一つは「あの戦争」、つまり「アジア・太平洋戦争」との相似の在り様。ベトナムと日本を重ねないこと、アメリカと日本をアナロジカルに捉えている点の特異です。二つ目は「あの戦争」の継続、1945年8月15日「あの戦争」は終わっていないということ。そして、三つ目は「この戦争」、つまりベトナム戦争、インドシナ戦争以後の日本のあり方です。具体的には、技術支援への興味を

清張が有し、行き届いた目配りをしていたことで、こうして過去、現在、未来のそれぞれに届く清張の視線が、『象の白い脚』には籠められているのです。

開高健は『南の墓標』で、『輝ける闇』というタイトルの理由を述べています。ハイデッガーが《何でもあるが何にもない》という観念を『輝ける闇』と呼んでいると友人から聞いて、付けたそうです。この《何でも見えるが何にも見えない》という図式が、『現代という図式』が、清張のラオス認識と重なつてくる気がするわけです。

谷口はこのビエンチャンはその輪郭に見当がつかないのが、気持にとけこめない主な理由かもしれない。《と言います。開高は《何でも見えるが何にも見えない》という感覚を吐露しましたが、清張は『象の白い脚』で《輪郭に見当がつかない》とラオスを評しているわけです。見えているように、実は全部見えていないのじゃないか、という疑いを籠めたこの感覚は『象の白い脚』という物語自体にも向けられるかと思えます。実は、この小説では、例えば、石田の死、山本の死、平尾正子の正体、シモーヌの過去、そしてなぜ谷口が発狂したか、これらの謎がどれ一つ明らかになっていないのです。大変雄弁に語られているように見えて、実は何一つ本当のことが書かれていません。まさに《何でも見えるが何にも見えない》状況が小説を通して、書かれているわけです。

開高は《何でも見えるが何にも見えない》という状況を、主体「私」の問題として書きました。一方で、清張は同じことを「状況」の問題として書いていると理解できるのではないのでしょうか。清張は《何でも見えるが何にも見えない》ことを書くために、ラオスを選んだとまとめることができるのではないかと思います。



フォーマティビティを強制していく。「あなたはジャーナリスト、あなたは記者、あなたは取材する

# 清張と戦争——読み継がれる体験と記憶



本年は第二次世界大戦終結後70年の節目の年にあたります。

松本清張は昭和18年10月、33歳で教育召集となり、三ヶ月後に一旦解除となりますが、19年6月に再度召集され、衛生兵として従軍し、20年8月15日、朝鮮半島で敗戦を迎えました。

軍隊の中の人間関係、上下関係、そして強固な官僚機構を確かな視線で捉えたことが、後の作品世界にはかり知れないほどの理解をもたらすこととなりました。

本企画展では、自伝的作品である「半生の記」を中心に、清張の戦争体験、戦時下での様々な出来事、それらを色濃く写した作品世界を、今に残る史料とともに紹介します。



開催期間：平成27年8月1日(土)～12月23日(水・祝)  
場 所：松本清張記念館2階ホール  
入 場 料：一般500円 中高生300円 小学生200円  
※常設展示観覧料含む

## I 出征—<sup>あか</sup>朱い蔵書印の記憶。

出征前日、死を想定して行ったのは、蔵書に印を捺すことだった。



清張が捺した蔵書印。



『家庭書道講座』吉澤義則著  
1937(昭和12)年 朝日新聞社〈清張蔵書〉  
清張が蔵書印を捺した本のうちの一冊。

## II 逃亡—赤い煉瓦塀の誘惑。

兵営を取り囲む赤煉瓦の低い塀を見るたび、逃亡したい誘惑に駆られた。



「回想的自叙伝」のち「半生の記」直筆原稿  
1963(昭和38)年8月～1965(昭和40)年1月「文藝」

## III 召集—赤紙が来た。

入隊検査で言われた謎の言葉——「ハンドウを回されたな」。なぜ自分が召集されたのか。



『遠い接近』  
文春文庫新装版 2014(平成26)年



『軍隊内務令』  
川流堂発行(清張蔵書) 1943(昭和18)年



『作家の手帖』  
1981(昭和56)年 文藝春秋



『世界歴史事典 第22巻 史料篇 日本』  
1955(昭和30)年 平凡社〈清張蔵書〉

## IV 設計—為政者の胸中、たぎる炎の赤。

伊藤博文の「大日本帝国憲法」と山県有朋の「軍人勅諭」。その制定にまつわる物語。



『西哲夢物語』1887(明治20)年〈清張蔵書〉  
自由民権派によって秘密出版された憲法制定関係資料を収めた小冊子。  
作品「夏島」では(わたし)が昭和49年に(九万八千円で)買ったとされる。



研究(創作)ノート「宰相論」  
清張自筆「研究(創作)ノート」の中の一冊。約30ページにわたり、主に〈読書録〉として、宰相たちの伝記類から要点や掲載ページを書き留めている。

## V 犠牲—接待婦を強いる、赤い紙燃。

くじ引きで行われた女性の人選。モーパッサンの小説との(近似性)がそこに。



『東京旋風 これが占領軍だった』  
H・E・ワイルズ著 井上勇訳  
1954(昭和29)年 時事通信社  
〈清張蔵書〉



『脂肪の塊』  
モーパッサン著 水野亮訳  
1938(昭和13)年初版 1953(昭和28)年発行 岩波文庫  
〈清張蔵書〉

## 展 示 品 紹 介

幅広い分野で活躍した清張の仕事を紹介するため、第一展示室ではジャンル別の展示を行っている。

入ってすぐの場所に「現代小説」のコーナーがある。ここには、明治期以降の時代背景が舞台の小説ならなんでも入るわけだが、推理小説や現代史ノンフィクションなどは別に紹介するので、ここには入っていない。主に文芸誌や月刊・週刊誌に掲載された現代小説の大半がこれを占める。その中に、女性雑誌に掲載された作品群というものがある。

現在当館で展示しているのは、「波の塔」が掲載された一九六〇年三月三日号「女性自身」と、「砂漠の塩」が掲載された一九六五年一〇月号、一二月号の「婦人公論」である。

「女性自身」は、「波の塔」連載が始まった一九五九年の前半に創刊されたばかりであった。高度経済成長期の日本に、女性週刊誌が相次いで発刊された、まさにその時である。女性誌に限らず、週刊誌ブームが起ったこの頃、清張は有望な書き手だった。清張自身も発表の場を限定せず、様々な媒体にチャレンジしていた。

清張ファンには女性読者が意外と多い。これは、記念館で多くの来館者や愛読者に触れての実感である。「波の塔」は、謎めいた上流夫人と若い検事との許されない恋を描いているが、背後にR省庁の汚職(取賄)などを配



## 『「波の塔」「砂漠の塩」掲載誌』

し、社会性にも富む。新しい時代を生きる女性読者を意識してか、新旧の女性像をあざやかに描き分けている。

戦前からの老舗「婦人公論」に連載された「砂漠の塩」は、これにあわせ清張と女優・新珠三千代が中近東取材旅行を行い、グラビア記事を掲載するという力の入れ様だった。毎号、その取材で撮影された現地の写真が使用されており、臨場感が漂う。中近東での新珠三千代は、洋装にサングラス姿で、砂漠の国を果敢に歩く女優といった扱いだ。事実、日本では前年に海外渡航自由化が始まったばかりで、この取材旅行はなかなかの冒険だったと思われる。「砂漠の塩」は一九六六年に第五回婦人公論読者賞を受賞した。やはり女性読者に支持された結果といえるだろう。

その他にも「霧の旗」(「婦人公論」)、「風の視線」(「女性自身」)、「花実のない森」(原題・黄色い杜「婦人画報」)、「絢爛たる流離」(「婦人公論」)、「神と野獣の日」(「女性自身」)など、以上の主なものに加え、さらに多くの女性誌に書かれた作品がある。

これらの小説は、雑誌を離れて他の作品と並んで書籍に収められても、何の遜色も違和感もない。それは、清張が単にメロドラマや恋愛小説を書いたのではなく、女性たちに向けて力強いメッセージを届けたからではないだろうか。

(専門学芸員 柳原暁子)

## 描 作品の舞台を訪ねて 「眩人」——玄昉という人 ④東大寺盧遮那大仏

清張は、玄昉が果たした役割を次のように表現する。玄昉の死によって聖武・光明政治の玄昉的ものが終わったのではなく、その後もますます進展するのである。(中略)玄昉が宮廷に植えたものは彼の死によって絶えたのではなく、その根はひろがり、強靱に成長し、道鏡を迎え入れる榕樹の密林となっていたのである。

(文藝春秋「松本清張全集51」「眩人」より)

〈玄昉的なもの〉。——それは、時の権力者に密接し、策謀をめぐらせて己の権勢をふるおうともがく、一個人の生き様であろうか。潰され、殺されようとも転生し、復活を遂げる、強靱にしたたかな野心家の系譜。その萌芽を培養しえた人物こそが、玄昉であったということか。

作中、彼は唐の則天武后の時代に寵を得た、薛懐義のやり方に倣おうとする。つまり、権力に近い女人に取り入って、倭国にも〈大像造立〉や一州一箇寺を實現させようとする。薛懐義はやがて驕慢となり、武后の鼻につき出して殺された。その転落までを、玄昉は当然知っていた筈ではなかったか。にもかかわらず、歯止めがきかなかつたのか、それとも、すべて承知のうえで同じ運命を受け入れたのか。その内面が語られないまま、物語は淡々と進行する。



東大寺大仏

物語「終章」、唐に帰った李密翳が、倭国から来た留学生の話によって、旧師である玄昉の死や大仏の完成を知り、次のように語る場面がある。

よくもそこまでやった、と自分は心から感嘆せずにはいられなかった。(中略)唐から帰った玄昉のひと言から皇后と皇帝のこの国家的な大事業、国家的な大浪費となったのだから、空恐ろしいかぎりである。

(同上)

内にあったのは、或いは、命をも顧みることのない激烈な野望であり、或いは、仏教興隆への堅固な覚悟であったといえまいか。異なる熱を放つ複数の思想が、ひとりの同じ人間の内面で、錯綜しているように思えてならない。



東大寺大仏殿

遙か古代の日本で、異国から経論や仏像のほか、先人の生き方までを将来し、自らの意思に殉じた人間がいた。史料に描かれた怪僧の深奥に分け入り、清張が見出したのは、多面性を秘めた不可解なひとりの人間ではなかったか。清張は、眩人とは、人の眼を眩惑する、胡魔化す、というのであって、古代から中世にかけて中国の西部を根拠地に長安にきていたイラン系胡人の奇術師、曲芸師のことである。これが奈良朝の遣唐使や留学僧などにくつついて来日し、奈良に居住したというのがわたしの想像である。(※と記し、作品では李密翳として結実する。が、その創作力をかきためた玄昉もまた、人の眼を眩惑する「眩人」であったのかもしれない。(終)

(※執筆のことは「眩人」新連載予告(「中央公論」一九七六年七月号掲載)

(加地尚子)

# 「現代東アジア文学史の国際共同研究」第3回ワークショップ 公開シンポジウム開催



科学研究費助成による国際共同研究「現代東アジア文学史」(2013.4～2017.3)のワークショップを、東京大学、台湾大学に続き当館で開催します。公開シンポジウムでは、東アジアポストモダン期文学の受容と変容、ポストモダン期アジアにおける作品の映像化、舞台化などについて、各国の研究者が発表し意見交換を行います。ぜひご参加ください。

2015年8月22日(土)

10:00～10:40

**基調講演** 『夏目漱石と魯迅：「夜の支那人」事件から「阿Q正伝」まで』

東京大学大学院教授 **藤井省三氏**

藤井省三氏プロフィール

専門：現代中国文学、中国語圏映画の研究など。

著書：『魯迅と日本文学——漱石・鷗外から清張・春樹まで』東大出版会 2015

### 基調講演は申込制

氏名、電話番号を、電話かFAXで【松本清張記念館公開シンポジウム係】までお知らせの上、お申込みください。

10:40～17:00 公開シンポジウム①

8月23日(日)10:00～17:00 公開シンポジウム②

※申込不要／参加無料／昼休憩あり

主催：東京大学文学部中国語中国文学研究室・北九州市立松本清張記念館

会場：記念館地階映像ホール

## 友の会 活動報告

### 朗読劇「駅路」「青春の彷徨」

5月30日(土) 参加者 162名

記念館 地階ホール

春の恒例行事となった劇団前進座による朗読劇。今年は、雨のため屋外特設スタンドが使用できず、館内での開催となりました。これまでに11回開催していますが、1日2作品の上演は今回が初めてです。いずれも短編でしたが、見事な脚本と役者さんの素晴らしい演技力で清張小説の世界が会場いっぱいに広がりました。また、屋外とは違った凝縮された空間の中での演技は、役者さんの息づかいが伝わり迫力満点でした。今回も、会場を埋め尽くした参加者の皆様から、多くの称賛の声をいただきました。



### 清張サロン

清張サロンは、清張作品や清張に関する話題をテーマとして、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流等を目的として開催しています。第7回は、記念館との共催として、友の会会員のほか一般市民の参加も募りました。今回も講師の方々に清張作品を掘り下げて解説していただき、とても充実したサロンとなりました。

第6回 3月27日(金) 参加者 25名 記念館 地階ホール

・テーマ 「軍師の境遇」—黒田官兵衛のこと—

・講師 小林慎也氏(元梅光学院大学教授・友の会会長)

第7回 6月19日(金) 参加者 53名 記念館 企画展示室

・テーマ 「象の白い脚」—松本清張の(駐在員小説)—

・講師 久保田裕子氏(福岡教育大学教授)

### 文学散歩「菊池寛記念館と小説の舞台を訪ねて」

5月17日(日)～18日(月) 参加者 36名

1日目 岡山駅→菊池寛記念館→霊山寺→渦の道→高松市中央公園

2日目 雲辺寺→瀬戸大橋→倉敷美観地区→吉備津神社

今回は、瀬戸大橋を渡って四国に渡り、高松市にある菊池寛記念館や小説「網」に登場する四国霊場、「内海の輪」に登場する倉敷などを巡りました。菊池寛は、清張が敬愛してやまなかった作家で、清張自身も高松市を訪れ、中央公園にある菊池寛の銅像を見えています。2日目の雲辺寺は、香川県と徳島県の県境の山の上であり、ロープウェイで上ります。登山道は急坂で「遍路ころがし」と言われています。今回は1泊2日の旅行でしたが、清張作品等に関係のある場所を中心に各地を訪問し、参加された皆様から「楽しく勉強ができた」「毎回参加したい」などの声が寄せられました。



### 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、『友の会だより』の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは

TEL.093-582-2761

北九州市立松本清張記念館 友の会事務局まで

## 平成27年度 読書感想文コンクール 中学生・高校生



清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

## 第17回 松本清張研究奨励事業 入選企画決定

17回目を迎えた「松本清張研究奨励事業」には、10点の応募企画が寄せられました。選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

第一線で活躍される入選者も増え、成果の蓄積が清張研究をさらに発展させています。今回の入選企画も、松本清張の活動の幅広さを示し、成果が期待されます。

【企画名】 作品中の鉄道乗車記録詳細と文学的効果の考察  
——清張世界への乗り鉄論的アプローチ

【入選者】 赤塚 隆二 元朝日新聞西日本社記者

【企画名】 イタリア社会派推理小説の成立における松本清張作品の受容  
——「霧の会議」とレオナルド・シャーシャ

【入選者】 吉村 法子 立命館大学大学院博士課程

## 第18回 松本清張研究奨励事業募集

### ■対象

- ①松本清張の作品や人物を研究する活動
  - ②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
- 上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人又は団体も可。

### ■内容

入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。

### ■応募方法

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(すべて様式は自由、ただし日本語)を、平成28年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧ください。  
か、記念館までお問い合わせください。



- ◆応募対象 全国の中学生・高校生
- ◆課題図書 中学生・高校生ともに下記から一作品  
『球形の荒野』(『球形の荒野』上・下 文春文庫)  
『遠い接近』(『遠い接近』文春文庫)  
『共犯者』(『共犯者』光文社文庫、『共犯者』新潮文庫)  
『西郷札』(『西郷札』光文社文庫、『西郷札』新潮文庫、『宮部みゆき責任編集 松本清張傑作短篇コレクション』下 文春文庫)

### ◆応募方法

- ◎中学生、高校生ともに 1200 ~ 2000 字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- ◎手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- ◎原稿は自作で未発表のものに限りません。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要な場合はコピーをおとりください。

### ◆応募締切

### ◆応募先

### ◆選考

### ◆発表

平成27年10月31日(土) ※当日消印有効  
松本清張記念館 読書感想文コンクール係  
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。  
松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知し表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

### ◆賞と商品

- ◎最優秀賞(1名)《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」
  - ◎優秀賞(中学の部…1名)(高校の部…1名)文具など(未定)
  - ◎佳作(中学の部…3名)(高校の部…3名)図書カード他
- ※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限定させていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。過去に受賞者からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

### ◆協力

モンブランジャパン

## 編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL093-582-2761  
FAX093-562-2303  
http://www.kid.ne.jp/seicho  
制作 有限会社シーズ



イラスト・山藤章二

開館時間:午前9時30分—午後6時[入館は午後5時30分まで]  
観覧料:一般500円[400円]・中高生300円[240円]・  
小学生200円[160円][ ]内は30名以上の団体料金

- JR小倉駅より徒歩15分・西小倉駅より徒歩5分
- バスは《小倉城・松本清張記念館前》下車
- 車は北九州都市高速、大手町ランプより5分

